

金賞ということを知らされ、とてもうれしかった。と同時に、この夏休みにがんばった甲斐があった。という充実感を体中で感じ、満ち足りた気持ちで帰る事ができました。

私も今年で中学3年、普通高校に進む人などは、この夏休みを勉強だけに全力をそそいでいるのだろうな。というあせりも感じましたが、この夏休みに受けたコンペティションで学んだことは、私にとってこれからのプラスになっていくことは間違いないと思いますし、又、この経験を基に、もっともっと努力し、飛躍して行こう、と思っています。



金賞 日本テレビ賞受賞 萩原晴美

今年初めて、ピティナのコンペティションに参加して、大変良い勉強になりました。

まずは、課題曲の難しさです。バロック、クラシック、ロマン、現代のそれぞれの時代より1曲ずつということで、その時代の曲のスタイルや、特徴などを知った上で、それをどのように表現するか……しかも、その4曲を一べんに弾く訳ですから、精神的なコントロールも必要です。最初は、なかなかうまく曲がまとまらずに苦苦ししましたが、弾きこんで、ピアノの先生がコンクールの為に開いてくださった何回かの勉強会で舞台ならしなどをしていくうちにだんだんとまとまり、コンクールでは、割と余裕を持って、あがったりすることもなく弾くことができました。

次に、仕上がった曲を人に聴かせるということの難しさです。一次予選の時は、自分としては割と調子良く弾

○パノウェッツ賞が生れるまで

ピティナ ヤングピアニスト コンペティション7年の歴史の中で、特級参加者が決勝会に進出したのは、今年で2回目であった。全国で特級参加者数名の中で晴れて決勝会進出し、協奏曲を除く特級課題曲の全6曲を演奏したのは、桐朋音大4年生の福田直樹君一人。

決勝会審査員の先生方の審査判定は、難行を極めた。ピティナでは、特級は国際コンクール派遣につながる。いきおい、国際コンクールに出場し得る実力を有するかどうか、審議的となる。そしてさらに受賞に値するかどうか問われ、評決となる。9:6で彼は、決勝参加賞となった。

ここで、海外招聘審査員ヨゼフ・パノウェッツ氏の特

くことができたのですが、東日本、準決勝と、どんどん進出していくにつれて、普段の練習の時にしたことのないようなミスをしてしまったり、コントロールがうまくいかず、悔いが残ってしまいました「演奏家というのは、いつも崖っ淵を歩いているようなもので、昨日成功したからといって、今日成功するとは限らない」というある偉大な演奏家の言葉がありますが、ひとつひとつの舞台での演奏を大切にしなければいけないと、演奏することの厳しさと、責任の重さというものを、身を以て学ぶことができました。

今回、こうして私が金賞をいただくことができましたのも、御指導くださったピアノの先生方、審査員の先生方、心暖まる応援をくださった皆様の御陰と心から感謝し、金賞という責任の重さを自覚して、これからもより良い演奏ができるように、一生懸命がんばっていきたいと思います。



▼E級受賞風景(決勝会)



別なる発言がおこなわれた。氏は、リストの再来といわれるピアニスト、そして多くの楽譜編纂者として知られ、ピティナと提携を持つジーナパッカウアー国際コンクールの顧問の一人でもある。

『福田直樹君がジーナパッカウアー国際コンクールに参加したとして、私は彼が必ずよい成績を修める保証をすることはできない。しかし、私が日本に来て五ヶ所の地区本選を聴いたが、殆どの学習者が、個性の乏しい演奏をしていた中で、彼一人が彼自身の音楽をもって、個性ある演奏をしたように思う。これは芸術表現として、尊いことである。』

来年6月のジーナパッカウアー国際コンクールまで、あと約10ヶ月ある。これからさらに良き指導を得て、磨きかければ今よりずっと成長するに違いない。また国際コンクールを体験することにより、彼の一層の向上が期待できると思う。ぜひ、国際コンクール派遣者に推薦したい。』だがしかし、再度の評決にも、福田君は派遣者には、選出されなかったのである。

そこで、パノウェッツ氏は、福田君の旅費の一部に氏自身の\$ 500を与えたいと、申し出され、ここに個人賞としてパノウェッツ賞が生れたのであった。

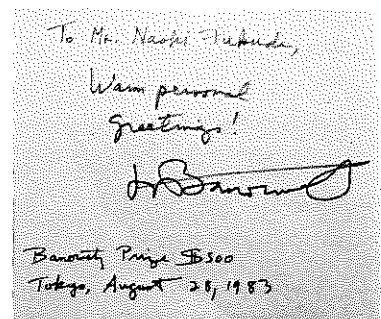


垣間見た “隔たり”の向こう

パノウェッツ賞受賞・特級 福田直樹

僕にとって音楽とは、面倒なものであり、不可解なものであり、そして頗る有意義なものである。

一つの作品を演奏しようとするときに、まずその作曲家がその作品にいったい何を託したのかを知りたいと思う。作曲者の心の底を見透かしてやろうと思うのだ。そしてそれから暫くは作品を相手に悪戦苦闘の毎日が続く。一つ一つの音をつまみ出しては意味を探ったり、メロディーラインをひっぱり出して着色したり……楽譜の裏側まで透かさばかりの念の入れようで。けれど、いかに努力しようとも所詮、作曲家と僕の間には、時代、感性その他もろもろの隔たりがあって、彼等の心理を想像、推理することができても、それ以上彼等に近づくことはできない。しかしこの「隔たり」と云う壁にぶつかったとき、それが僕の音楽の出発点であると思いたい。そして「隔たり」があることによって音楽の可能性が無限に広がっていくものだとも思う。この、とてつもなく大きな壁は、そうそうたやすく越えることはできない。ときには自分自身が何であるのかわからなくなり、しまいには「もうこりごりだ」と投げ出しかけ、しかし、今までそれをさせなかったものは、周囲の暖かい目であり、励ましの言葉であった。そして今回この賞は僕に大きな希望を持たせてくれるものであり、さらに、地区予選からの数々の審査員の方の批評や、一般の方々の拍手は「隔り」の壁を越えたときの、身震いしそうな満足感に一瞬手が届いた様な、そんな夢を見せてくれた。



PTNA YOUNG PIANIST COMPETITION